

どうぶつこうえんニュース

Chiba Zoological Park News

No.25



どうぶつと私… (20)

Animals and I

動物写真家への道

久田雅夫

東京都鳥獣保護員 動物写真家



子供の頃は、皆んな同じことをして楽しんだと思いますが、私も昆虫や、小鳥を飼育したり観察したりすることがとても大好きでした。今の私は、その頃の自分がそのまま大人になってしまった感じです。

今から30年前、北半球世界一周ヒッチハイクに出掛けた。25歳の時でした。デンマークのコペンハーゲン市で働いていた時のことです。休日を利用して、公園を散歩していた時のことです。私の目前で、突然、スズメの仲間が、自動車にハネられてしまったのです。野鳥は、苦しそうに羽をバタバタしながらもがいていた。ところが何んと運転手は、車を止めて、その野鳥を拾い上げ、救急車を呼び連れていったのです。それは、動物病院ではないかと思います。日本では信じられない世界でした。今でも鮮明にそのシーンを覚えています。ネイチャーショックというのでしょうか。デンマーク人の痛みを感じる、優しい心、救急車を呼んだ行動。これらの行為は、数十年でつちかわれたものではないことがわかります。親子代々受け継がれた、デンマークの素晴らしい、伝統のある精神文化だと思いました。

そしてそのことが、いつまでも脳裏に焼きついて離れなかったのです。このことが後の私の人生を180°変えた大きな分岐点でした。37歳の失敗のゆるされない時でした。①世の中のために少し役にたつこと。②好きなことが続けられること。③最低でいいから生活が出来ること。この3つの課題をかかげ、動物写真家として独立、スタートした。兄弟、家族、友人たちは全員反対、それを押し切って無謀な動物カメラマンが誕生しました。「きれいごとでは飯は食えないが、ロマンを捨てたら人生終りだ」と自分に言い聞かせて、紆余曲折し、夢中で十数年が経過、絶滅に近い国の天然記念物、ツシマヤマネコ、地域的に数が少なくなった貴重な東京の野生動物をライフワークに撮り続けました。年に一度、アラスカ、カナダ、アメリカ本土、北欧とそれぞれ出掛けました。ツシマヤマネコ、東京の野生動物、グリズリーと写真集も出版しました。子供3人には、貧乏させてしまったが、いつか親父の生きざまがわかってくれるくるだろうと願っています。

3年前、野生動物が、いつでも近くで、観察出来、撮影が出来る山小屋を、奥多町に借りることが出来た。裏山に出てくる東京の野生動物はキツネ、タヌキ、テン、アナグマ、ハクビシン、シカ、リス、カモシカ等。これらの動物に毎日かこまれながら、楽しい日々を送っています。

目次

表紙 ヨーロッパバイソン	1
どうぶつと私20	2
グラビア フクロテナガザル	3
特集 「種の保存会議開催される」	4
飼育レポート 「1996年 ダチョウの孵化育離状況」	5
子ども動物園へようこそ	6
アメリカの動物園、博物館見聞記 I	8
動物公園の動物20	9
動物公園の植物10	9
動物公園日誌から	10
飼育よもやま話	11

表紙の動物説明

ヨーロッパバイソン

体つきはヤクに似ていますが、長い毛で覆われているのは前半身だけで、肩のあたりが目だって高くなっているのが特徴です。

古くはヨーロッパからシベリアの一部にかけて広く分布していましたが、1920年頃、野生のものは絶滅してしまいました。現在はヨーロッパの動物園などで飼われていたものをもとに繁殖させ、野生下に戻して保護しています。

撮影 宮川 千尋

動物飼育数

哺乳類	65種	409点
鳥 類	89種	383点
爬虫類	4種	20点
両生類	1種	1点
魚 類	2種	6点
総 計	161種	819点
平成9年 1月末現在		

フクロテナガザル

siamang

霊長目 テナガザル科



スマトラとマレー半島南部の原生林に住み、木の葉や果実を好んで食べます。ほとんど樹上で生活し、枝から枝へ巧みな腕渡り（ブラキエーション）で移動します。

雄雌とも喉のところに袋を持ち、それを膨らませて共鳴させた大きな声でなくてテリトリーを宣言したりコミュニケーションの手段とします。

動物公園でも腕渡りしたり喉を膨らませて大きな声でなく姿は大変人気があります。

（秦 舜二 Shunji Hata）

種の保存会議開催される

平成8年11月12日、13日の2日間にわたり(社)日本動物園水族館協会主催「第9回種保存会議」が千葉市動物公園の担当で開催されました。

この種保存会議は、協会に加盟している動物園や水族館が互いに手を結び、飼育動物の長期的な繁殖計画を作り、飼育下での個体群をどのように維持していくのかを話し合う会議です。昭和63年に、東京上野動物園で第1回の会議が開催され、そこで、コアラ、ゴリラ、アムールトラ、クロサイ、タンチョウ、アジアアロワナ等、33種の動物が、緊急に繁殖計画を立てなければならない優先種として、選定されました。これらの動物は、野生での生息地においても、生物多様性の破壊が進み、絶滅に瀕している希少種となっているもので、動物園・水族館で飼育している個体を有効に活用し、各園館が協力して増やし、将来的には、それを野生復帰させ種の保存を図ろうと、この計画はスタートしました。会議を重ね、1996年現在では、繁殖計画検討種が110種類になっており、そのうち30種類が千葉市動物公園でも飼育展示されています。

当園も、昭和60年の開園当初より、「動植物とのふれあい」をテーマに、世界中で絶滅の危機に瀕している動物を1種でも多く繁殖させようと実績を重ねてきました。その結果、第3回名古屋での会議で、当園はホオカザリヅルの繁殖計画を調整する担当園に選ばれました。

ホオカザリヅルの繁殖計画を立てるため、まず国内で飼育されているホオカザリヅル全羽を把握しなければなりません。協会発行の年報を基に、過去飼育されていた園館も含め、各園館が、飼育しているホオカザリヅルの各個体情報(個体番号、性別、愛称、出生地、年令、両親の名前等)を集めました。次に個体ごとの情報を基に、国内で飼育されているホオカザリヅルの戸籍一覧表を作りました。動物の移動(繁殖、死亡、搬入、搬出)があった場合は、年2回の調査で順次記載されます。それを基に、毎年血統登録書を発行し、これを見ればホオカザリヅルの由来、血縁関係等が一目瞭然にわかります。同時に血統登録書は、国際血統登録担当者にも送付します。こうすることにより、近親交配を防ぎ、遺伝的多様性を保ちながら継続した繁殖計画を立てることが出来ます。また、毎年1回飼育施設に競合する、タンチョウ、マナヅル、ニホンコウノトリの登録担当者と合同で作業部会を開き、1年間の飼育繁殖状況を報告し、繁殖計画を推進するための意見交換も行っています。

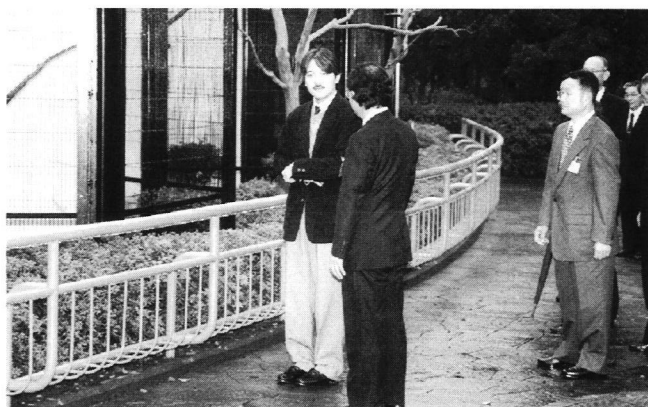
現在ホオカザリヅルは、国内で20羽しか飼育されておらず、しかも、産卵するペアは、上野動物園のペアだけです。そこで鳥類が補充卵を産む習性を利用して、1年に出来るだけ多く孵化させようと、最後のクラッチのみ親にまかせ、その他は人工孵化させる方法をとっています。さらに当園は、登録担当園でもあるため、上野動物園から卵を譲り受け、人工孵化を行っています。今年は、2羽の雛が生育しています。野生のホオカザリヅルは、アフリカに現在8,000～10,000羽生息していると推定されますが、減少傾向にあり、飼育下での個体群の維持が急務となっています。

当園では、その他マーモセット類とボトの登録担当園でもあ

り、先に述べた繁殖検討種のうち30種もの動物を飼育しており、他園館と協力して、動物の移動を実施して、繁殖に努めています。こうした実績が評価され、第9回種保存会議が当園で開催されたことは、意義深い事だと思います。

(社)日本動物園水族館協会では、昭和63年から秋篠宮殿下を總裁に推薦しています。殿下は、家禽系統分類学、民族魚類学、魚類分類学の研究にいそしんでおられ、会議出席に際して当園を御観察くださいました。

11月12日午後1時、当園正門に御到着され、園内を子ども動物園、家畜の原種ゾーン、鳥類水系ゾーン、モンキーゾーンと次々と御観察されました。子ども動物園では、こんどは家族で来園



したいとお話になっておられました。また家畜の原種ゾーンの野鶏舎では、殿下御自身が家禽類の調査研究を進められており、平成8年9月に、「ニワトリの起源が赤色野鶏単一に由来する」とした論文で、博士号(理学)を取得されたこともあり、繁殖研究についての説明を細かくお聞きになられました。鳥類水系ゾーンでは、特にハシビロコウに興味深くご覧になられ、当園職員がお見送りするなか次の視察場所の市美術館に向われました。



翌13日は、終日会議に出席され、熱心に各報告をお聞きになられました。殿下は、会議終了後、会議場である幕張プリンスホテルより無事帰路におつきになられました。

当園では、「第9回種保存会議」を担当させていただき、実り多い会議が成功のうちに終ることが出来たこと、また、秋篠宮殿下に御来園いただき、2時間にもわたり、御視察いただけたことを今後の励みとして、より一層種の保存事業に貢献するとともに、将来の子供達にも、一種でも多くの動物を見ていただけるよう、願っています。

(小林正典 Masanori Kobayashi)

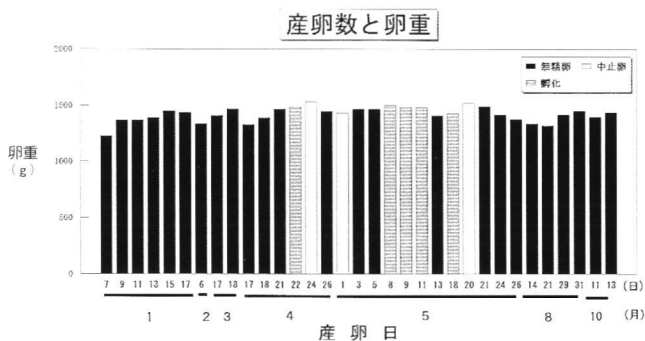
1996年 ダチョウの孵化育雛状況

今回紹介するダチョウは現存の鳥類の中で最も大きく、飛ぶことができないことで有名です。この他にもレア、ヒクイドリ、エミュ、キーウイといった鳥たちも空を飛ばずもっぱら地上を歩いたり、走ったりしています。これらの仲間はまとめて走鳥類と呼ばれています。

千葉市動物公園では1988年よりダチョウを飼育してきて過去何度か孵化・育雛がみられましたが、今回は比較的長期に渡って雛の育成をみる事ができたため、報告したいと思います。

野生下での繁殖期は4～5に分けられる亜種の生息地により違いはありますが、主に乾期に営巣します。また砂漠化の進んだ土地で生活しています。しかし、この雨の多い日本で、産卵から抱卵まで1カ月近くかかるのに、地面を簡単に耕して柔らかくしただけの巣で親に抱卵をまかせると、卵は水びたしになってしまいます。またカラスの被害も考えて人工孵化の方法をとりました。

現在雄、雌1羽ずつ飼育していますが、1996年の産卵は1月7日～10月13日までみられ、数は33個でした。しかし1995年10月4日～1996年4月1日と6月11日～12月2日まで雌を傷の手当てで隔離していたため、少なくともこの期間の卵は無精卵（7個）となります。この卵を入れる孵卵器は自動転卵式で設定温度は36.0℃、湿度は28.9%としました。（下図）



ダチョウの卵は長径16cm、短径は12cm程度、重さは1,300～1,600gと卵の中で最大で普通の孵卵器には入らず特別に作った卵を置く台（卵座）に入れ、また一度に入る数も6個と限られるため数回に分けて孵化を試みました。

孵卵器に卵を入れてから43日後、6月17日に1羽めの孵化がみられました。いくら発育の進んだ状態で孵化する早成性の鳥だとはいっても、羽は濡れて脚は水っぽくブヨブヨして、腹にはまだ卵黄が残って柔らかく弱々しい姿です。この腹にたまっている卵黄のおかげで、数日間飲まず食わずでも生きていくことができ、その間に餌の食べ方を学んでいきます。孵化2日後、羽も乾いて孵卵器から育雛箱へ移動です。育雛箱は縦90cm、横180cm、高さ90cmの木板の箱で、ヒーターランプで保温されています。

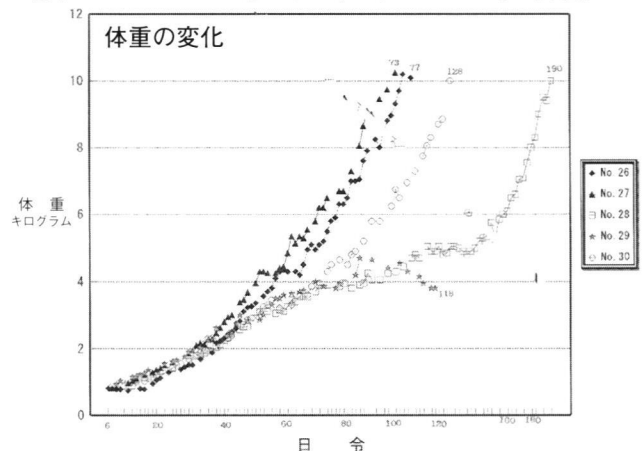
餌はヒヨコ用の配合飼料と細かくきざんだキャベツ、すりば

ちで粉状にしたカキガラを与えました。食べ方は私たち飼育係が教えることができないのでニワトリの雛と一緒にします。しかし、ダチョウの雛は床にある餌よりも動いているヒヨコのほうをつつくばかりで、なかなか食べ方を覚えてくれません。体重が減ってきて心配していた頃、6月24日に2羽、6月28日に1羽と孵化があり、兄弟ができて落ち着いたので餌をついばむようになり体重も増えていきました。孵化後2週間もたった頃には、ふやけ気味だった脚もすっかり鳥らしいものになり、餌のついばみ方の先生役であったヒヨコも不必要となり取り上げました。7月11日にも卵がかえり、合計5羽となりました。

飛ぶことをやめ、陸上を生活圏に選んだダチョウは太い脚を持ち、2本の指によって時速50kmのスピードで長距離を走ることができ、瞬間的には時速70kmを出すといわれています。この丈夫な脚をつくるには雛の頃からの運動が必要です。通常の仕事の合間をみて雛たちを表に連れ出し散歩をさせます。初めの頃は人の足元をチョロチョロ歩き不安な鳴き声を上げていましたが、数日たつと好き勝手に歩いて行動範囲が広がっていき、育雛箱に連れて帰るのに苦労するほどになりました。体も大きくなっていき、そろそろ育雛箱が手狭となり、予備の動物舎の床に麻袋を敷いた所を寝室とし、餌もヒヨコ用から成鶏配合飼料へと変えていきました。

このまま順調に育成してくれると思っていた矢先、3番目の雛の左目が腫れてしまいました。ゴミが入ったのか、ほかの雛につつかれたのかしたのでしょうか。洗浄をして軟膏を塗るという治療を続けて、膿が出て白濁もなくなり、腫れも引いてきました。けれども、その間片目だけで不自由したのか精神的ショックが大きかったのか、体重が伸び悩み現在にいたっています。

1997年1月の時点で、一羽が栄養障害で死亡してしまったほかは4羽の雛たちは成長を続けています。体重は10kgを超えて保定が困難となってきたため体重などの測定は中止しましたが、足から頭までの高さは一番大きいもので170cm程度にまでなり、仕草の一つ一つがダチョウらしくなってきました。（下図）



今回のダチョウの育雛に立ち会ってみて、多くのことを学ぶことができました。これからも彼等の成長を見続けていきたいと思っています。

（樽川 修 Osamu Tarukawa）

子ども動物園へようこそ

モルモットの飼い方

和名をテンジクネズミといいます。

16世紀、ヨーロッパで紹介され、実験動物・ペットとし飼われ、長い歴史をもつ動物です。白・茶・黒の三色で、単毛・巻毛・長毛などがあります。寿命は平均5年位です。

基本的には丈夫で飼いやすいのですが、夏場の暑さと湿気には弱いので注意しましょう。

〈餌・水〉

完全なる植物性のため、専用の人工飼料、野菜を与えます。又、体内でビタミンCを作ることができないので、野菜・栄養補助食品や飲水として与えさせる必要があります。子供の時や夏の暑い時期、水分の与え方に注意をしましょう。

〈ケージ〉

大きい体ですが余り活発に動き回らないので、比較的狭いケージで飼育できます。40cm位のケージにワンペアが目安です。床のスノコに足を引っかけることがあります。足の入らない大きさのものか、木製のものがよいでしょう。水槽は、フンや尿で汚れやすいため、おすすめできません。

〈繁殖〉

生後3ヶ月位から繁殖できます。妊娠期間は約70日、産まれた子供は毛も生えそろう、目も開いておりすぐに歩き出します。2～3週間は親の乳を飲ませ、育てさせたほうがよいでしょう。

マウスの飼い方（ハツカネズミ）

ペットショップで「マウス」として売られているのは「ハツカネズミ」です。一般的に白い体・赤い目の個体が売られていますが、グレーから茶褐色・黒色とさまざまな毛色のものがあります。

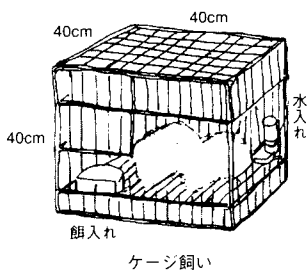
けんかは余りしないので、同性をある程度の数、一緒に飼うこともできます。共食いを防ぐのであるならば、繁殖させる時だけ一緒にして、あとは個別に飼育するほうがよいでしょう。

〈餌・水〉

何でも食べる雑食性の動物です。小さい体の割によく食べますので多めに餌は与えましょう。冬の寒さに弱いので、特に冬場、栄養価の高いものを餌として与えるとよいでしょう。



モルモットの持ち方



水入れは皿状のものは、体をぬらしたり、こぼしやすいことが多いので、ボトルタイプがいいでしょう。

〈ケージ〉

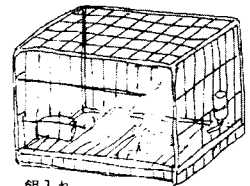
ハムスター用ケージがかじられる心配もなく、出入口に止め金がついていて便利です。ケージ内には隠れ家を入れてやりませう。体が小さい割によく食べますので、一週間に一度は掃除をしましょう。夏場は数回の掃除が動物にとってもよいことです。

〈繁殖〉

生後2ヶ月位から繁殖できます。妊娠期間は20日間位です。一年中、ネズミ算式に繁殖し、一回の産子数は6～10匹です。複数飼育の場合、妊娠雌は隔離します。産まれたての子供は毛が無く、目も開いていませんが、2週間位で一人歩きをはじめ3週間位で離乳します。



マウスの持ち方



マウスケージ飼い

プレーリードックの飼い方

プレーリードックは、犬の仲間ではなく、リスの仲間です。後足で立ち上がり、前足をおなかの前で重ね、回りをきょろきょろ…得意のポーズです。20世紀に、ヨーロッパから北アメリカに開拓者が入ってくると、畑を荒らす害獣として捕獲激減したが、現在では国立公園の中で保護されています。

〈餌・水〉

雑食性ですが、草食傾向が強いので、植物質中心に与えます。肥りやすいので、餌のやり過ぎに注意しましょう。水はいつでも飲めるようたっぷりとあげましょう。

〈ケージ〉

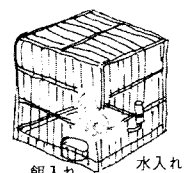
立体的な活動はしないので、高さのないケージでも飼育できます。一辺が40～50cmのケージで1～2頭です。運動不足になりがちなので、ケージから出し部屋で遊ばせてあげましょう。人によく馴れます。

〈繁殖〉

ペットとして飼われている場合にはまず考えられません。



野生でのプレーリードック



なかにワラなどをひく



ハムスターの飼い方



ハムスター



単独飼育



ハムスターの持ち方



ハムスターの代表“ゴールデンハムスター”は、シリアで採集された野生の数個体が現在のペットや実験動物として世界中の親になった話は有名です。繁殖力が強く、飼育しやすい動物で、単独で生活しているためか、見かけによらず、ケンカ好きです。繁殖時以外は単独で飼育するようにします。基本的に夜行性なので夜中に暴れ出してうるさいこともあります。

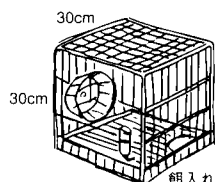
〈餌・水〉

ハムスターは雑食性の動物です。普段の主食は、専用の人工飼料に、他の食品や栄養補助食を与えます。妊娠中のメス親と寒い時期には動物質の餌も与えましょう。他のネズミ類よりも太りやすい傾向があるので、やり過ぎには注意が必要です。

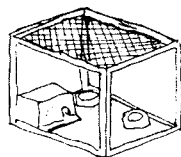
水はケージ内を汚しやすいので、ボトルタイプにするか、野菜などから、水分を取るようにしてもよいでしょう。

〈ケージ〉

市販のハムスター用か、一回り大きいリス用のケージが適しています。入り口に、どちらにも止め金がついていて安心です。水槽やフラケースは、冬場は風を通さないのですが夏場は蒸れるため注意しましょう。



餌入れ
ハムスターケージ



ケージ（水槽）

〈繁殖〉

早い個体では1ヶ月ほどで繁殖ができるようになりますが、あまり若いうちの繁殖は、死産したり、親にも負担になります。

繁殖期はほぼ一年中です。妊娠期間は約15日で、メスは神経質



太りすぎに注意



になっていますので、オスは別にし、必要以外は静かにしておきましょう。子供は10日前後で、巣箱から出てくるようになります。20～25日で完全に離乳します。離乳がすんだら親と離れたほうが安全です。

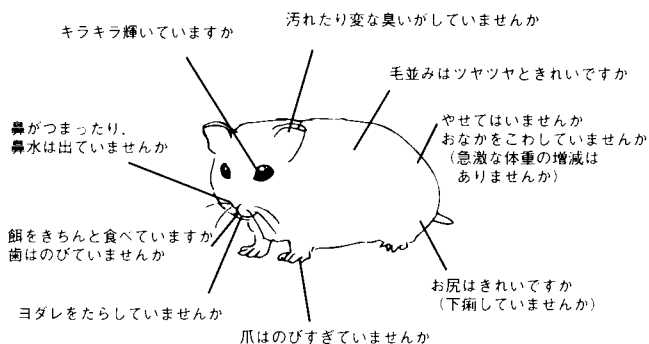
その他としてハムスターは夏の暑さ・

湿気に、冬の寒さには非常に弱いので、水槽やフラケースで飼育する場合は特に注意する必要があります。



一健康チェックー

人がそれぞれ飼っている動物が異なるように、その人がペットである動物に何を求めるかで違ってきます。動物を求める健康のチェックポイントについて考えてみることにしましょう。



（林 まさ代 Masayo hayashi）

小動物コーナー日誌から

「ほら、こわくないから、さわってごらん」と子供に言われているお母さんがいました。さて結果は？！

「こいつ、好奇心おおせいだなあ。俺みたいだ。」ひぎのうえのハツカネズミに言っていた男の子が一人いました。

男の子「これ、トサカだよネ。男のヒヨコなんだ。よかったー女のヒヨコはちょっとネ。」（学校で女の子にかわいがられているのかな）係り、男の子の顔を見ちゃう。

お父さん「ハツカネズミを飼おうヨ。」とお母さんにたのんでいました。お母さんの心の中「飼ったって、めんどろ見るのかな？」ヒヨコを抱っこした女の子「このヒヨコかわいい！ヒヨコまんじゅうみたい！？」

「こんにちは」とウサギに声をかけていた女の子「ウサギさんしゃべってくれないヨー？」（ウサギは九官鳥ではありません）

子供にモルモットを抱っこさせようとしていた若いお父さん、逃げ出した子供に言っていました。「ちょっと、ハハだって、こわいんだから…」

三人連れのお父さん、マウスを見ながら得意気に「これはメスこれはオス」と雌雄判別…それは全部メスですとは言えず！「ねえ、ハツカネズミって何で白いの？色をぬってあるから」と男の子、お母さんに真剣に聞いていました。

幼稚園生位の男の子、「ねえ、このウサギウィンクしてくれたよ。」といいながらウィンクしてくれました。

（かわいい！）

ウサギの爪切を見ていたお父さん「あれ、きつとオスだよ。」お母さん「なんで」お父さん「ひぎまくらで、おとなしくしているから」

アメリカの動物園，博物館 見聞記 I

はじめに

1996年11月17日～12月1日の15日間、千葉市短期海外派遣研修生として、アメリカの動物園、自然史博物館、子ども博物館を視察しました。その見聞記を数回にわけてレポートします。

○ブロンクス動物園 Wild life Consevation Park

11月18日朝、セントラルパークの近くでブロンクス行きのバスに乗り、20分くらいでブロンクス動物園へ到着します。

アメリカの大都市ニューヨーク（人口730万人）の郊外になるブロンクス動物園は近年大改築を行い、生息環境を再現した展示施設（以後“生態的展示”と呼ぶ）で動物を展示しているアメリカの動物園でも最先端をいく動物園である。

4つの入口のうち北東の入口から入ると、橋の下には溪流のようなブロンクス川が流れていて、自然の中にいる気分になります。園内に入ると、ハイイロリスがたくさんいて、1日園内にただで数十回も出会いました。少し進むと、広々とした草地にアメリカバイソンが20～30m離れた所に7～8頭がかたまっており、乾草？を食べていました。観客側は木柵で、そのすぐ向うに、太さ3mmくらいの針金でできた高さ1.5mくらいの網があり、こんなものすぐに壊して逃げないのかと思いました。しかし、あとで職員に聞くとヨーロッパバイソンでは壊されるかもしれないが、アメリカバイソンでは大丈夫とのことでした。

次は“World of Bird”という建物に入りました。ハミングバードやゴクラクチョウなどがそれぞれの生息環境を再現した



World of Birds

ガラスばりの展示室で飼われています。干潟の鳥は忠実に干潟を再現し背景は精密に壁に描かれています。さらに進むと、シフゾウやツル類が1種ずつ（ツルはひとつがいくつか）水辺のある林の1区画をそのまま囲ったような大きな放飼場で展示されていました。岩場の背景にいるホッキョクグマとグリズリーを見たあと、“Himalayan Highlands”（ヒマラヤ高地）という屋外の生態的展示を見ました。角の立派なアイベックスの頭の骨（模型）のころがっている草地にはニジギジ、大きな岩の多い草地にはユキヒョウ、大きな倒木のある林にはレッサーパンダがまさに生息地にいるようにそれぞれ展示されています。キジはガラスごしに、ユキヒョウはたてには張られたワイヤーごしに、レッサーパンダは直接みることができます。ユキヒョウは来園者に見やすい位置で動物が休むよう、フロアーヒーター

のうめ込まれた大きな平たい擬岩があり、そこで寝そべっていました。そして、“World of Darkness”（闇の世界）の建物に入ると、コウモリ、ハダカデバネズミ（ミツバチのような社会構成をもったモグラの仲間）などが展示されていました。

そして軽く昼食を食べた後、事前にアポイントメントを取っていた哺乳類のアシスタント・キュレーターのPatrick Thomasさんに園内を案内してもらいました。“Baboon Reserve”はエチオピアの高地の環境を再現した放飼場にゲラダヒビの小さな群れとアイベックスの群れを一緒に展示していました。ゲラダヒビは数群れいて、交替で展示していました。この動物園の呼び物のひとつである“Jungle World”はアメリカの動物園協会の展示賞をもらっています。建物の中は通路が曲がりくねったり、下ったり上ったり、展示物も見下したり見上げたり、近くを見たり遠くを見たり、変化にとんだ構成になっています。アジアの川辺の林を再現した展示では擬木の上にテングザル、水面にはコツメカワウソ5～6頭がくずほぐれつて遊んでいました。ゴリラの放飼場はせまく、しかし室内は擬岩などで変化をつけてありました。シルバーバックのオスと数頭のメスと子どもたちの群れが飼われていて、どのゴリラも落ちついていてゆったりとすごしていました。人工卵割の卵移植による双子が産まれ育っており、その母子は群れとは別に飼われていました。

アフリカの動物を展示していた地区では、キリン、ダチョウ、ライオンなどが広々とした放飼場において、その近くにはゾウの頭骨やたくさんのダチョウの卵の模型などが置かれ、また、種ごとの動物の説明、野生での生態、保護、飼育下での状況など捕食者と被捕食者の関係などをカラーの大きなパネルを使って説明していました。そのパネルはキュレーターが中心に原稿を書き製作は外注しており、内容のレベルは高校生ぐらいで、1～3年で新しいものにつくりかえています。

最後に事務局にもどり、Thomasさんに毎日の飼育記録について詳しく聞きました。

そうこうしているうちに、閉園時間近くなり、ゾウ、猛きん類は見ることができず、冬はやっていない“Wild Asia”のモノレールや子ども動物園も見学できませんでした。園内は冬のウィークデイとあって家族連れや小学生の校外学習の団体が少しみられただけでしたが、ボランティアの人が“Himalayan Highlands”で熱心に動物の説明をしていました。

夕ぐれが近づく中、園を出て、地下鉄でホテルの近くまでもどりました。



Jungle World



ブロンクス動物園を運営している協会のロゴマーク

（宝川 範久 Norihisa Takaragawa）

動物公園の動物…②⑩

Animals in the Chiba Zoological Park

アミメキリン

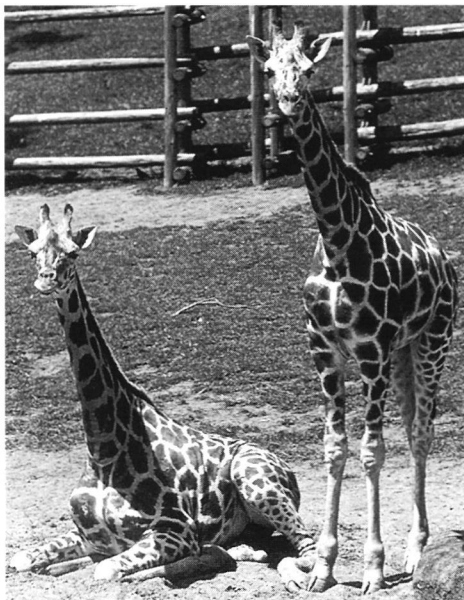
現在キリン科にはキリンのほかに、アフリカのザイールの森林だけに棲息し、原始的なキリンの段階にとどまっている希少動物「オカピ」がいるだけです。キリンは体の色と模様そして角の生え方などから、9亜種に分けられています。当園には動物園で一般的によく見られる「アミメキリン」がいます。

棲息地は、サハラ砂漠以南のアカシアなどの樹木が生えた草原および疎開林や半砂漠地帯で、低地から海拔2000mの高原にもいます。2〜3頭のメスとその子供たちで群れをつくりオスが加わることもあります。食物は木の葉や小枝が主食ですが、花や果実そして草も食べることがあります。長さが40cm以上もある舌を伸ばして木の枝をたぐりよせ、口の中にとりこみ下顎の切歯で切り取ります。1日の12〜16時間以上を食べることに費やすと言われますが、動物園では木の葉を主食に与えることは困難なので、青草や乾草などあまり舌を伸ばして採食しないものが主食になり、木の葉はおやつ程度になります。

その結果木柵や壁等を舌で舐めまわすストレスが原因と見られる行動をします。この葉食動物「キリン」のストレスの解消方法としては、コアラなみにエサ専用の林を作って、ある程度の木の葉の量を1年中確保することが理想だと思います。

休息や睡眠は普通立ったままでとりますが、安全だと思えば前肢と片方の後肢を体の下に折たたみ、残りの後肢を横に投げ出すようにして座ります。

繁殖期は1年中で、飼育下では3才ぐらいで繁殖できるようになります。1腹1子で、妊娠期間は15カ月前後、子は生まれると30分ぐらいで立ち上がり、1時間ぐらいで歩き回ようになります。現在動物園には、昨年の7月12日に生まれたオスの子キリンがいます。名前は「ムーサン」と言って、サマースクールに来た子供達につけてもらいました。



キリンの一番の見所は走る姿でしょう。左右の前肢がほぼ同時に踏みだされますが、バランスをとるために長い首をゆっくり前後に振りながら走ります。まるでスローモーションを見ているようですが、時速50km近くで優雅に走ります。

「見渡すかぎりの草原を数頭で走るキリン。その姿を高台の椅子に腰掛けて眼でおいかける。」そのような展示場があれば誰でも思わず、「ああ、ぜいたくだなあ」とつぶやくでしょう。

(佐藤 幹雄 Mikio Satoh)

動物公園の植物…⑩

The plants in the Chiba Zoological Park

コブシ

コブシは、モクレン科モクレン属の落葉高木です。山野に生えていて、高さ5〜18mになります。

葉は、長さ6〜13cmのほぼ卵形で、表面はみずみずしい光沢感があり、カキの葉に似ています。裏面は淡緑色で、葉脈に小毛があります。

分布は、ほぼ日本全域、韓国(済州島)となっています。銀色のやわらかい毛に包まれた冬芽を、枝先につけ、3〜4月頃6〜10cmの芳香のある、白い花が咲きます。



花弁は、6個で広がって咲き、基部は紅色を帯び、花の下に一枚の若葉をつけるのが特徴です。

この頃、枝先一面に咲く白い花が、山野や庭先でひととき目立ちます。同じ属のモクレンは、コブシより遅れて咲きはじめて、花のつき方がやや違います。コブシが花弁を開いて咲くのに対してモクレンは、上に向かってまるでつぼみのように、極端な表現ですが、枝先にチューリップの花がついたようにも見えます。

暑い夏が過ぎ9〜10月頃、もこもことしたコブ状の集合果が熟し、袋状の表面が裂け、赤色の種子を白い糸で吊り下げます。

コブシの名は、つぼみの形に基づいてつけられたようですが、実の形も、にぎり拳に似ているような気がします。

別名、実をかむと辛味があるのでヤマアラギ、コブシハジカミともよばれます。

コブシの樹は、庭木、接ぎ木の台木、家具、楽器などの用途、また、樹皮、芽、花は、薬用や香辛料にもするようです。

園内の、樹林地を残して造成した部分には、かなり大きくなった樹が所々に見られ、修景のために植栽されたものなどと併せて、四季を感じさせてくれます。

今年も、春の訪れを、ほかの木々の若葉が萌え出す前に、枝先一面の花を一斉に咲かせ、にぎやかに、いち早く知らせてくれると思います。

(齋藤 哲朗 Tetsuro Saito)

動物公園日誌から

From Zoological Park Diary

'96年8月1日～'96年12月31日

8月2日 ビーバー池にカラス除けのワイヤーを取りつける
モウコノウマ、シマウマ2種、ムフロンの、腰麻痺
予防薬投与

8月6日 緊急保護のパンケーキリクガメ、5頭二次収容先の
名古屋市東山動植物園へ搬出

8月7日 獣医実習、一円さん（鳥取大）本日より17日まで

8月8日 ムフロンの（耳標井005）、朝から破水しており、な
かなか出産出来ず、介添するも夕方母仔共死亡する

8月9日 夜行獣展示場の照明50%減光により、スレンダーロ
リス、かなり動きが活発になる

8月14日 アジアゾウ、マウント行動あり

8月16日 シロガオマーモセット、新生仔1頭死亡

8月19日 獣医実習、田端さん（北里大）本日より9月1日まで

〃 スミレコンゴウインコ、タンチョウ（コタル）、ア
フリカヘラサギ、性別判定のため皮膚採集

8月23日 ポリビアリスザル（1頭）繁殖

8月27日 ミケリス（雄1、雌1）、動物交換で新着

9月1日 ヤク、（雌1頭）繁殖

〃 カリフォルニアアシカ（愛称マユ、雌）、動物交換
で搬出

〃 学芸員実習、高井さん（東京農大）本日で終る

9月2日 コサンケイ（雄1、雌1）、シロミミキジ（雄1、
雌1）動物交換で新着

9月3日 中学生職場訪問あり（千城台中学）

9月8日 ワタボウシハンシェ、9月4日に2頭出産したが、
親にしがみつからないため、2頭共人工哺育とする

9月9日 ポリビアリスザル（6頭）、動物交換で搬出

〃 シロガオマーモセット（1頭）繁殖

9月17日 アメリカビーバー（雄）、プールに入らない為、捕
獲し放飼場に出す。30分後プールで潜水するようにな
ったが、まだドーム内には戻れず

9月18日 アフリカマメガン（雄）死亡する

9月22日 「動物愛護週間特別講演会」開催

9月23日 第1次開園以来ベア飼育のジェフロイクモザル、1
仔出産する

〃 台風被害の為、子ども動物園のみ臨時閉鎖とする

9月24日 スレンダーロリス（雄）死亡

9月27日 コウラウン（15羽）、ゴシキソウシチョウ（6羽）、
アカハラコノハドリ（5羽）、動物交換で新着

9月28日 セスジクスクス（1頭）繁殖（顔出し）

9月29日 「ワンポイントウォッチング」開催（ヤケイ類）

〃 ヤク（9月1日生）の仔、角が生え始める

9月30日 園内、全域停電（年次定期点検のため）

10月1日 キジ、ヤマドリ、ヤケイ類に、鶏痘ワクチン接種

10月4日 トナカイ（雌）、袋角むけ始める

10月7日 アオエリヤケイ（雄1、雌2）、ハイイロヤケイ

（雄1、雌2）、動物交換で新着

アオミミキジ（雄1、雌1）、動物交換で搬出

10月8日 ヤギ・ヒツジ（全頭）、腰麻痺予防接種

10月11日 クロオビヒメアオバト、朝人工孵化するが、夕方死
亡してしまう

10月13日 「折り紙教室」開催

10月14日 ヤツガシラ（雌1羽）、死亡

10月15日 中学生職場訪問あり（緑が丘中学）

10月20日 「ワンポイントウォッチング」開催（夜行獣）

10月26日 「アニマルスクール」開催

10月27日 「動物を計る会」開催

10月29日 オウギアイサ（雄1羽）、死亡

〃 キビタイコノハドリ（10羽）、動物交換で新着

10月31日 セーブルアンテロープ（雌1頭）、繁殖するが、仔
は脚開きで起立不能のため、授乳出来ず、人工哺乳
をするが、11月1日には死亡する

11月1日 カラフトフクロウ（雄1羽、雌1羽）、動物交換で
新着

11月2日 コウラウン（雌1羽）、死亡

11月3日 「ズークイズラリー」開催

〃 アミメキリン（雌・ヤエ）、急性心不全で朝獣舎内
ですでに死亡していた

11月6日 ホオカザリヅル（雌1羽）、1週間位前に雄に追わ
れ隔離中であつたが、頸椎打撲等により死亡する

11月7日 カビバラ（1頭）、繁殖

11月9日 フンボルトペンギン（雌1羽）、死亡

11月10日 「写真コンクール授賞式、講演会」開催

11月12日 第9回種保存会議開催（～13日まで）
※日本動物園水族館協会総裁秋篠宮殿下、園内御視
察

11月13日 10月7日に新着したアオエリヤケイ（雌1羽）、骨
折による衰弱著しく、死亡

11月19日 シコクヤマドリ（雄1羽）、肺炎で死亡

11月24日 「ワンポイントウォッチング」開催（ムフロンの）

12月1日 ムフロンの（1頭）、繁殖

12月6日 中学生職場訪問あり（土気南中学）

12月8日 「クリスマス音楽会」開催

12月14日 マンドリル（雄1頭）、敗血症で死亡

〃 ダマワラビー（1頭）、繁殖（顔出し）

12月19日 ホオカザリヅルの種卵1個、上野動物園より譲り受
け、孵卵器に入卵する

12月21日 オウカンエボシドリ（5羽）、南房ハラダイスより
受贈

12月23日 フンボルトペンギン（雌1羽）、肺・気管の炎症で死
亡

12月24日 猛禽類およびキジ類、ニューカッスル予防接種

12月25日 アジアゾウ、頻繁にマウント行動あり

飼育よもやま話

Animal Episode

キリンの搬出

1995年、当園では約140頭のさまざまな動物が生まれました。これらの動物は永続的に飼われ続けるわけではありません。というのも動物を飼うスペースには限度があり、それを飼育する職員の数にも限度があるからです。それではこれらの動物はどうなるのでしょうか？そのほとんどは他の動物園に引きとられたり、時には他の動物と交換で搬出されます。動物を搬出する時は、主に車や飛行機、船などを使って移動させますが、その中に動物をそのまま乗せるわけにはいきません。小動物の場合はドックケージなどで事足りますが、大きな動物にはその大きさに合った輸送箱が必要になります。その輸送箱に入れるのがまたひと苦労なのです。輸送箱は、たいていはその動物一頭がやっと入れる位の大きさなので、それに好んで入ろうとする動物は、そうはいません。

昨年、一歳を過ぎたばかりのキリンの仔を搬出した時の事です。たいがい搬出されるキリンは、乳離れしてまもなくの子供です。というのも、大きくなればなる程、搬出に困難がつきまわるからです。しかし一歳のキリンとはいえ、身長はすでに3m以上あります。輸送箱に収容するのも、職員が10人以上必要になります。まず普段使用している獣舎に、親から離し一頭で閉じ込めます。次にその獣舎につながる通路に輸送箱を置き、その後ろに行けないように回りをせき止めます。そして取っ手のついた厚いベニヤ板を一枚につき2、3人でもち、3枚以上のベニヤでキリンを箱に追い込みます。箱に入った瞬間にぶ厚い扉を閉め門を入れる、という手はずだったのですが、キリンの仔は



中で急反転し、扉を押してきたのです。さすがにキリンの力にはかなわず、我々は押しもどされてしまいました。そしてパニックになったキリンは、ものすごい勢いで押し板を蹴破って獣舎に戻ってしまったのです。そのときに飼育係員2名がそれぞれ、手の指と太ももに軽いケガをしました。押し板はというと、キリンのたったひと蹴りでボロボロに…。その蹴りが人間に入っていたらと思うと、今でもゾッとします。結局はなんとか収容できたのですが、我々飼育係の命を張った一瞬でした。

(伊藤 泰志 Yasushi Itoh)

飼育係のバカンス

「畜生！ またはまってしまった」

この仕事をしていると旅先でも動物園に立寄ってしまう。海外旅行でもしかり、というよりは外国の動物園の方が日本の動物園では味わえない刺激があり、動物園目当てで旅行を組んだりしてしまう。休暇なのか仕事なのかと毎度妻にはあきれられる。この夏休みは休暇を意識してギリシャに決めた。子供の頃からあの遺跡の風景には憧れていたし、何よりも、ギリシャには動物園が無いとの噂（本当か？）。動物のことは忘れゆくりしようと思った。

エーゲ海の真中にサントリーニという「三日月型」の島がある。昔、火山の爆発により島のほとんどが吹き飛んでしまった島である。突端の岬にあるアクロティリの遺跡はBC.2000年位の町の跡だそうで、件の大爆発の時に埋もれてしまったのだそうだ。ここからの出土品は当時の文明の高さを見せつけた。その出土品の中でも有名なのが「ボクシングをする少年」というフレスコ画である。美しい色彩と高度な描写で一躍有名になった。現在実物はアテネの国立考古学博物館の一角に収められており、さすがにその前は人だかりである。その両脇にひっそりと動物のフレスコ画がある。サルとレイヨウの一群で、サルは流れる様に数匹の青いサルが飛び交っており、レイヨウはガゼルの仲間であまり躍動感のある緻密な絵である。BC.2000のエーゲ海のだ真中に何故こんなものがある。アフリカとの交易があったろう。しかし、これだけの数のガゼルを船で運んだというのか。現代に於てもレイヨウ類の長距離輸送は危険が伴う。臆病なのでパニックになると箱の中で飛び跳ね首を折ったり、角が動物自身にも凶器と化す。同時代のエジプトの遺跡にもアダックスの壁画があるが、当時のエジプトの絵画技術は模式的な絵だが、これは19世紀の博物画にも負けない描写で、実物を見ながらでなければ描けないだろう。どう船に積み込んだ？ 船で何日かかった？ 船上で餌は？ ……煙を上げる火山を背景に4000年も昔のエーゲ海のだ真中に「動物園」が存在したというのか？ 動物園の原型は、BC10世紀イスラエルのソロモン王と中国の文王の動物コレクションが起源とどの書物にも判を押した様に書かれている。しかし、このフレスコ画はそれよりさらに千年は遡る。動物のコレクション位で何をそんなに熱くならないかもしない。そんな昔に動物の長距離輸送と飼育の技術が存在したことへの感動もさることながら、この生き生きとした描写が飼育下で可能だったことだ。幾ら優れた画家を擁しても現代の動物園で、これだけの絵を描く環境は提供できないと思う。今動物園の時代の最先端は「生態・環境展示」と言われている。動物が自然の中にいる様に生き活きと見てもらえることが目標である。しかし、私の頭の中で20世紀の最先端動物園像への信望が4000年前のたった2枚のフレスコ画の前でガラガラと音を立てて崩れ去った。そしてまた動物抜きのバカンスも同じく…「畜生またはまってしまった！」

(清田 義昭 Yosiaki Kiyota)



カピバラ